

所在地 西宮市戸崎町1-13
連絡先 0798-67-0079

写真 澤 良雄
文 小山一彦



旧甲子園ホテル(武庫川女子大学 甲子園会館パンフレットより)玄関正面

JR神戸線で、神戸より大阪へ向かう途中、武庫川に近づくといつも気になるものがある。フラッグがなびく2つの尖塔である。今回は、その尖塔をもつ西の帝国ホテルと称された旧甲子園ホテルを紹介しします。この建物は、ご承知の様にフランク・ロイド・ライトの愛弟子、遠藤 新(1889~1951)と当時、帝国ホテルのマネージャーで、ホテル界の第一人者といわれた林 愛作(1873~1951)の理想に基づいて計画された。遠藤 新はハード面、林 愛作はソフト面でこのホテルに一方ならぬ情熱をそそいでいるのが、遠藤の著述より察することが出来る。以下に原文のまま、それを紹介する。

甲子園ホテルについて

私は林さんの甲子園ホテルを設計したというだけで、今日明日の問題としてのホテルといった様な命題に対しては寧ろ林さんがいうことも持ってるし、書くべきであろうと思います。

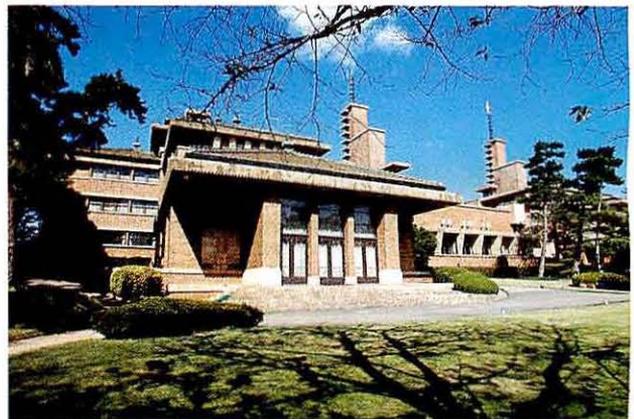
ですから、ここでは自然林氏の代弁の恰好で甲子園ホテル設計の生い立ちを顧みることにいたします。

林さんに従えば、日本の宿屋のサービスは実に優れたもので世界の何処に行ってもこんなかゆい所に手の届く様な世話をやいてくれる所はありません。

これに反して日本のホテルは御座なりで、事務所見たいでチャチで辛い世間がホテルとはこんなものと思うて居てくれるから其れで通ってはいるものの、実はサービスからみて世界中の何処のホテルも喰い足りない。

それで今日ホテル、ホテルと人はいうけれど実はこんなホテルではいけない。ただ日本の今日の宿屋にはいろいろ不都合不都合がある。

まず一に一現の御客様お断りというのがある。一現差支



南面よりのブランケットホール



ホテル時代の南面(著述にある塘池が前面に見える)

なしとして、一体どんな部屋にいくらでとめてくれるのかさっぱり判らない。

さても世に古く番頭さんが帳場から一にらみ、御客の相場をふんで松の何番梅の何番を押しつける。

それから女中さんへの心付け御茶代、これには誰も困る様子ケチだと思われたくもないし、多過ぎて馬鹿々々しいというので自惚と財布が焦心する不快さ、そして結局高いものが日本の宿屋だと人がよくいう。

次に風呂、便所、戸締り、隣の部屋への筒抜け、それと寝具の気まずさ。

これは西洋人を相手に出来ないばかりでなく日本の婦人が宿る訳にも行かない。

等々で結局日本の現在の宿屋はサービスで優れて設備で劣っているということになる。

そこでこの設備にこのサービスを加えて打って一丸としたホテルが出来ないものかというのが、林さんの考えて出来るというのも林さんの意見で、そして出来上がったのが甲子園ホテルだという次第です。

かつて林さんは何かに理想のホテルという題で書いたことがある。其れは八畳の日本間と十畳の洋間と続いたもので内廊下様のもので廊下に接して居り、洋間を居間日本間を寝室或いは食堂等に使う。そして女中の一方の部屋への出入りも他の部屋からあまり見えないようなものでした。

この案が骨子です。然しこれを色々研究して見ますと、どうも普通に長廊下を取って其の両側に配置したのではどうも納まりがつかいません。一体長廊下そのものが好ましいものではありません。

そこで甲子園では約六間角のブロックに上述の林式の部屋二組と普通の部屋二つを納め其れを三つ組み合せ中央にエレベーター、階段、ホール、フロアステーション、パントリー女中休憩室、其れからシングルベッドの客の為の便所浴室等を纏めて三葉形三階の一团となし此れを左右に配して中央を低くパブリックスペースで続なぎ以て其下はセントラルキッチンセントラルボイラーに当て、其上はルーフガーデンとなるという結構。そして料理場とボイラーの煙突を左右にして此れに通風と数個のファイアプレースの煙突を纏め、此れを抜き出して左右の均整に配するの構図。

此れを前後十尺の高低に配して、どの部屋にも光線の行き渡る工夫。

事実料理場は南の陽を充分に受けて食堂にしてもよい程の立派さ。其外ホテル界の第一人者としての林さんがマネージャーの方向からする研究と併せて付帯設備付帯工事の組織を系統立ててあることは特筆してよいと思います。

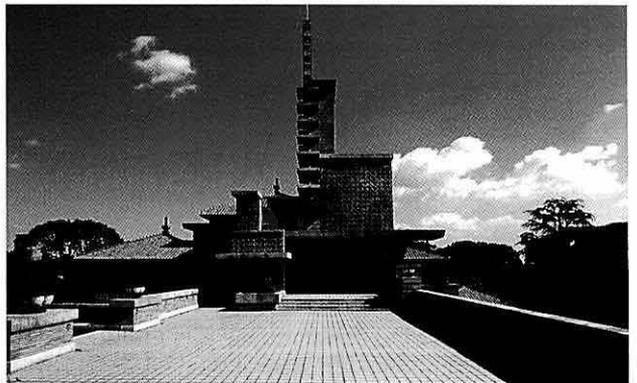
場所は阪神をつなぐ新国道に添うて稀大阪に近く位置し、砂白く松緑なる武庫川岸、舟を浮かべるによるしき塘池を庭にして遥かに海と山とを併せたる風光。

とにかくこんな風にして、一般の住宅よりも廊下の短いホテル、日本人の風俗慣習に適合して家庭的な趣きの、婦人にも子供にも都合のよいホテルが出来上がりました。

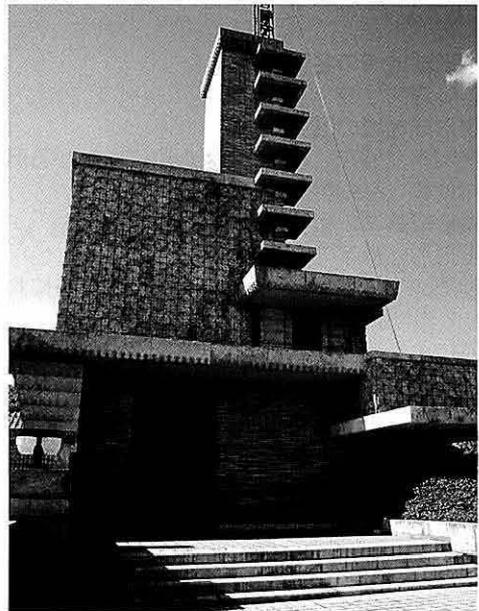
—(「婦人之友」1930年5月)

著述によれば、竣工当事ホテルのプランが見て取れる様にわかる。早速、オリジナルプランと現在のプランとの照合を計るが、少し異なる。それは、昭和5(1930)年ホテルとして誕生し、昭和19(1944)年海軍病院として収用、昭和20(1945)年米・進駐軍の将校宿舎とクラブで使用、昭和32(1957)年米軍引き揚げ後大蔵省の管理下になり昭和40(1965)年武庫川学園が譲り受けて改修を行い教育施設として再生を計られた変遷を見ると理解できる。ただ、細部のディテールにかんしては当事のままでデザイン全体の基調とした「打ち出の小槌」のモチーフが随所にみられる。今回は、紙面の都合もありオリジナル図面・オープン当事の貴重な写真などの紹介出来ません。

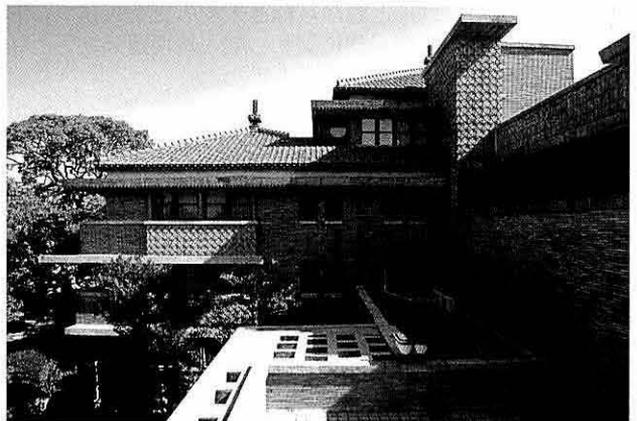
次回で資料を掲載する予定なので、今回の記述と共に図面を読んでいただければと思います。



ルーフガーデン(煙突の下に突き出した庇)



ルーフガーデンへの開口部(テラコッタ仕上げの壁面)



ルーフガーデンより東側客室棟をみる(庇に採光の為か?開口が設けてある)



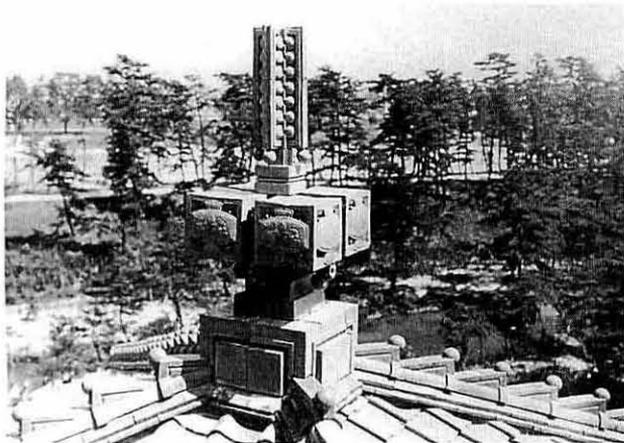
東側客室棟屋根(棟飾りに打ち出の小槌のモチーフが見られる)

所在地 西宮市戸崎町1-13
 連絡先 0798-67-0079

写真 澤 良雄
 文 小山一彦



旧甲子園ホテル(武庫川女子大学 甲子園会館所有オリジナル写真より) 玄関正面



屋根棟飾り(打ち出の小槌のモチーフが見られる:撮影者・日時不明)

前回案内した様に、今回は資料編として旧甲子園ホテルの図面・写真(武庫川女子大学 甲子園会館所有資料)を掲載します。又、現甲子園会館は1995(平成7)年に阪神淡路大震災で被災しているが、建物の損傷は仕上げ材の落下、亀裂が殆んど無く、建具についても支障なく開閉できる。ただ照明器(シャンデリア)のシェルが40個程度壊れただけと報告を聞くが、これは、帝国ホテルで実証された建設地の選定、鉄筋コンクリート造で仕上げ材(素焼のポーダタイル、加工した亀山岩)を型枠代わりに用いた工法などが考えられる。

当初リゾートホテルとして計画・建設された甲子園ホテルは時代の変遷と共にその沿革、周辺の状況の変化により存在自体が薄らいでゆくのが寂しく感じられ、ホテルオープン当初は国道2号線(記述による新国道)より塘池越しにみる威風堂々とした立面が偲ばれる。



南面(西側屋根より:撮影者・日時不明)



南東バンケットホール内部(撮影者・日時不明)



玄関横部分（庇の開口より陽がさす 現在は樹木により隠れている：撮影者・日時不明）



ホテル当時の1階売店（撮影者・日時不明）



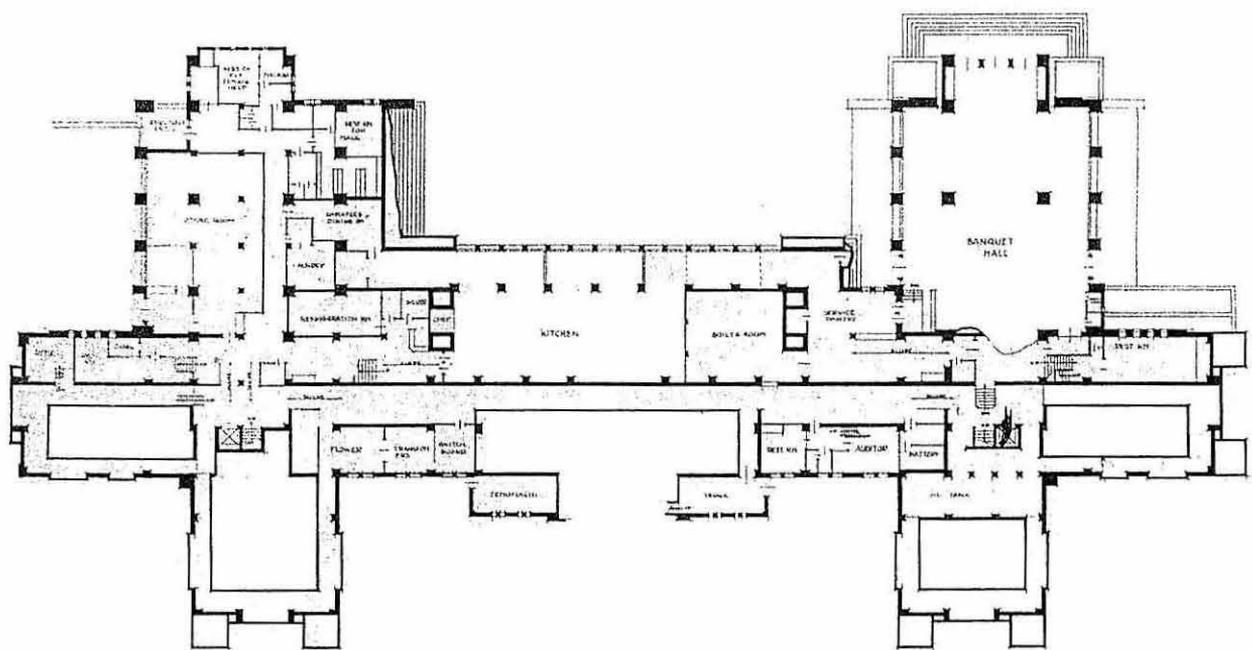
南西よりの概観（撮影者・日時不明）

◇甲子園ホテル当時の宿泊料金（一泊）

- 洋室一人室（洗面器付） 五円
- 同 二人室（専用浴室付） 一人 八円より
二人 十二円より
- 同次の間付（専用浴室付） 一人 十円より
二人 十五円より
- 和洋二室（専用浴室付） 一人 十円より
二人 十五円より
- 四階海日本間） 二人まで七円より
一人増す毎に三五円
- 浴槽は陶製にて日本式
- 敷蒲布団は特製ばねふとん

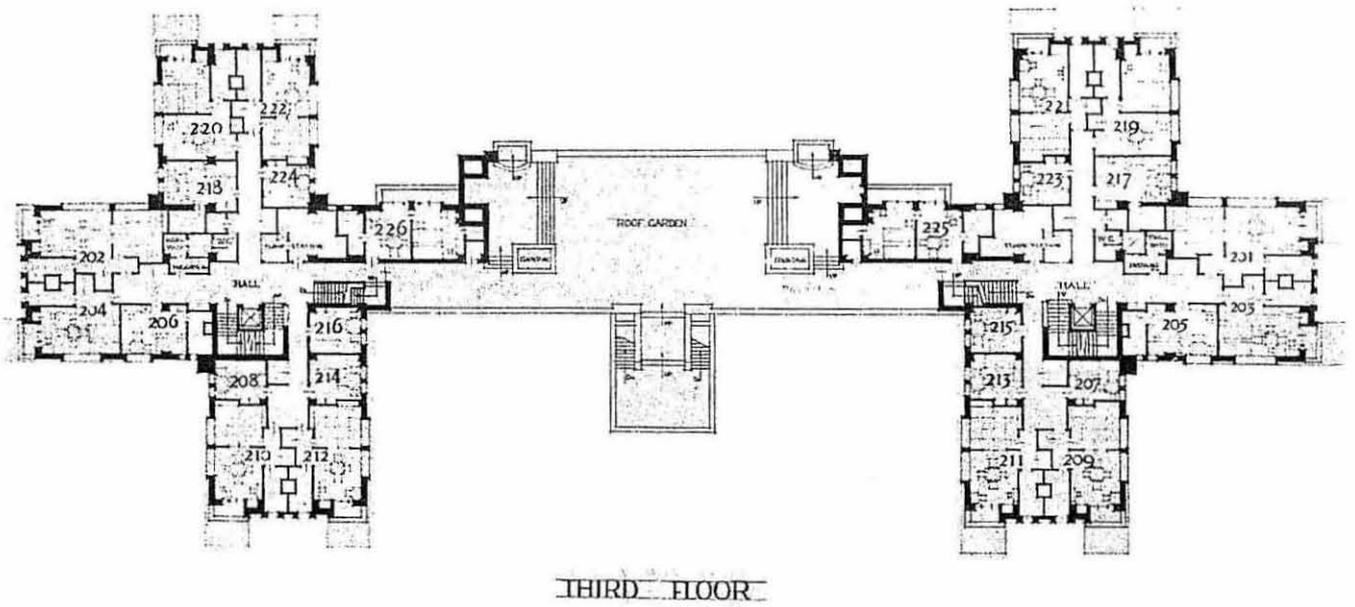
◇甲子園ホテル当時の食事価格

- 朝食 一円五十銭
- 昼食 二円
- 夕食 二円五十銭



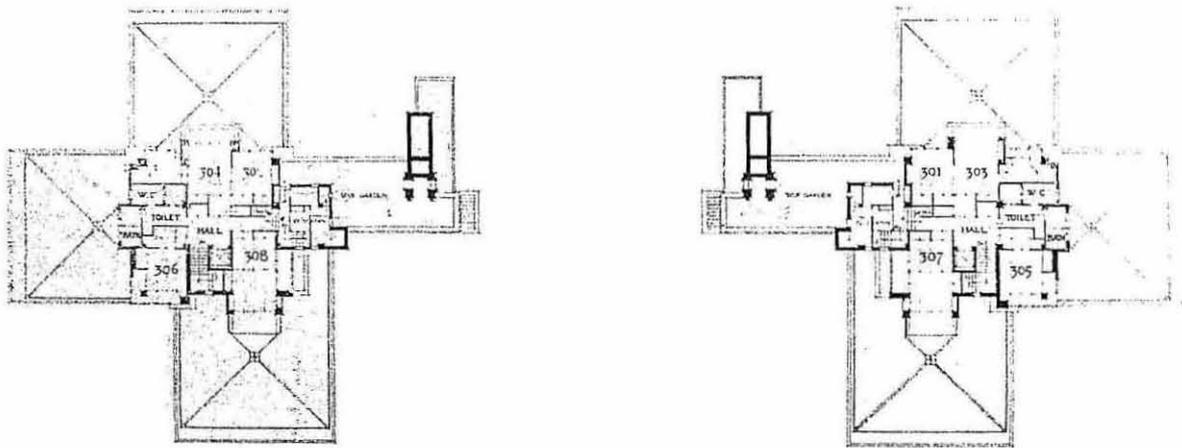
BASEMENT

遠藤 新 オリジナル設計図：地下階平面図（建築家 遠藤 新 作品集より）



THIRD FLOOR

遠藤 新 オリジナル設計図:3階平面図(建築家 遠藤 新 作品集より)



FOURTH FLOOR

遠藤 新 オリジナル設計図:4階平面図(建築家 遠藤 新 作品集より)